

“企業別組合を中心とした民衆組合” とは (下)

——社会運動的労働組合としての高野総評に関する文献研究

篠田 徹

はじめに

- 1 これまで高野総評は、どう語られ、どのように理解されてきたか
- 2 社会運動的労働組合論と高野総評
- 3 歴史的ブロックと戦後革新勢力 (以上, 前号)
- 4 運動文化と国民文化会議 (以下, 本号)
- 5 社会運動の世界史のなかの高野総評

おわりに

4 運動文化と国民文化会議

清水が指摘する、戦後革新勢力における、「知的市民と知的エリートの高い比重」は、高野総評にその淵源があることは、論をまたない。これまで、いわれてきたように、講和条約反対から護憲連合結成にいたる、高野総評とリベラル知識人との連携の過程は、そのひとつの重要な契機であることは、まちがいない。

けれども、さきに述べたように、この「知的市民と知的エリートの高い比重」をもった戦後革新勢力が、高野時代には、より広い範囲で展望されたと同時に、高野総評が、この知的市民と知的エリートの連携に、こめた戦略的意図も、従来指摘されてきた政治的なレベルを、はるかに超えたものではなかったか。

ここで先のデニングの引用を、もういちど思いおこしたい。とくにそのなかの、ニュー・ディールにおける人民戦線は、国家権力やヘゲモニーは握らなかったが、新興労働者階級の間では、政治経済のみならず、社会文化的に絶大な影響力をほこったという指摘。それから、人民戦線理解には、社会勢力連合の階級基盤に関する理解と同時に、その文化的な理解、それもその連合がかかげたイデオロギーの形だけでなく、その連合が発しつづけた社会的メッセージの意味の検討が重要だという問題提起。そして、宗教的な熱によって、多様な背景をもった人びとが、すいよせられてできた、政治的、経済的のみならず、社会的、文化的にも強く特徴づけられるCIO労働者階級への言及。

こうした点をふまえて、社会勢力連合の上部構造、とりわけ文化運動としての諸側面を分析し、労組関連の文化活動、国の民主的文化政策、マスコミを含む大衆文化産業の発展が、相乗的につく

りだした意味空間を文化戦線と総称したのが、デニングの前掲書である。

いま、これらの点を高野総評の状況と、つきあわせてみたとき、高野総評が加盟労組と、すでに深い連携にあった知的エリートの、全面支援のもとで設立した国民文化会議の存在と、それがひとつの大きな推進力となった、戦後民主主義文化の形成という問題が、重要な検討対象としてうかびあがってくる。

ただ、筆者の力不足にくわえ、紙幅の関係もあり、またこれまで、国民文化会議についての研究が、ほとんどなされてこなかった、という事情もあって、いま会議の組織や活動の、中味に立ち入った説明はできない⁽³³⁾。そこで、ここではむしろ、いまふれたデニングの観点を参考にしながら、国民文化会議が象徴した、高野総評の「文化戦線」の本質と、その戦線のひろがりについて、仮説的に述べたい。

デニングが著書のなかで、注目している概念に運動文化（Movement Culture）がある。この概念は、19世紀後半のアメリカで起った、ポピュリズム運動という広範な農民運動の意味を、注意深く探った、グドウィンによって、つくられた。

グドウィンは、それまで東部資本の搾取に対する中西部の農民反乱という、ポピュリズムの政治経済的な理解に対して、教育をつうじて、農民の間に、幅広い協同を段階的に実現しながら、東部資本の搾取という政治経済状況下で、精神的に疲弊した民衆の自尊心を回復させ、協同性を發揮させる、農民の民主主義運動という、社会文化的な理解を提示し、その特徴をあらわすために、運動文化という考えを用いた。

「ポピュリズムとは……民主主義というものが、われわれに何を約束してくれるのかを示した、まさに「そのとき」をいうのである。この民主主義の約束とは、（ポピュリズムの運動にかかわった）二〇〇万の人びとが、行動でしめした……みなで分かちあう尊厳と、ひとりひとりが、こうありたいという熱い想いに満ちた、すなわち…平等というものに、希望をもつという精神である。民衆の運動であるポピュリズムは、どこまでも開かれ、どこまでも熱く、これでよしと満足することなく、だからこそ、いつまでも、新しいものをつくりだしてゆく、つまり、人間とは、なにかにむかって努力してゆく存在だという思いを、強めてゆくものなのである……けれども、この農民反乱は、民主主義の約束というものを、たださし示しただけではなかった。それは、まがりなりにも、民主主義の形式をそなえた社会に住む人びとが、本当に自由を得るためには、どうしたらよいか、民主主義的な形式をもちながら、非民主主義的な内容をもった文化に生れ育った人びとが、それに挑戦して、民主主義にかぎりない希望がもてる、自分たちの文化というものを、どうしたらつくれるのか、そういうことも、あきらかにした。いつも何かにおびえなければならぬ人びとが、どうしたら、自分というものを雄雄しく、そして気高く表現することを可能にしてくれる、心理的な空間というものを、つくりだせるのか、自分たちを、経済的に追い立て、文化的に締めつける、抗いがたい力をもって現れてきた、世

⁽³³⁾ 国民文化会議については、総括的な文献として、国民文化会議編・発行『国民文化会議四五年の経過報告書/資料・解説』2001年がある。なお最近会が所蔵していた資料が、大原社研に寄贈され、現在整理中である。

の中の新しい仕組みが、目のまえに立ちだかるなかで、それでも自分は自分でありたいという願いを、どうしたらはたせるのか。この農民反乱がさし示したのは、そういうことへの、ひとつの答えである。たしかに、このポピュリスト運動がまとめたオマハ綱領は、この民衆運動にとって、ひとつの重要な、政治的で象徴的な意味を与えた。けれどもこの運動が、本当になしたことは、この運動の意味するところをあらわした、ひとつの、明解な考え方に他ならない。すなわち、ポピュリストたちは、もし自分が自由になりたかったら、ほかの人たちと協力しなければならぬ。自助が基本の社会で生きながら、ポピュリストは、民主主義の本質にかかわる大事な問題について……考えをめぐらし、行動していった。それまで自分がかんじがらめになってきた、考え方やふるまいから、自分をふりほどき、自分で考え、それにしたがって、自信をもって行動するためには、人びとは、自分はほかの人たちに支えられていると、感じなければならない。新しい民主主義の形をつくろうと思ったら、人びとは、同じことをしている「自分たちを自覚する」必要がある……根本において、ポピュリストであることの真髄は……自由という名のもとに、人びとはいかにふるまうことができるか、を語ることにいってもよい……ポピュリズム運動とは、民主主義がその力を発揮するために、わたしたちは、ほんとうのところ、どう行動すればいいのかをさし示した。「……兄弟愛」、それが答えである⁽³⁴⁾。」

このポピュリズムの運動文化の例は、単に既存社会で大勢的なものの考え方から脱却し、新たな社会観を集団的に形成する方法という、運動文化の一般的な理解に、有用であるのにとどまらない。

個人の自立自助が過度に強調される、形式的な自由と民主主義の社会で、その権利を十分享受していない集団が、そのことをより主体的な問題として受けとめ、実質的な自由と民主主義を獲得しようとして行動するには、個人の限界を同じ境遇にある他者との協力によってのりこえながら、個々の自尊心の回復と集合的なアイデンティティ形成が相互に進むことを知る、学習過程が不可欠であることを示したポピュリズム運動のように、運動文化は、個と集団の積極的な相互作用による、人間的な成長において、その力をもっともよく発揮するのである。

そして、高野総評をとりまく環境が、まさにこの運動文化の形成が、もっとも適合的であったと思われる状況にあったことを、次に引く久野収の状況認識が示している。

「日本の民主主義はついに一つの段落にたどりついた。それはもはや誰の目にも疑いえない明白な事実である。地方選挙における自由党の勝利と単独講和への大きな歩みは、この事実を何よりも雄弁に物語っている。現在この結末に立って、五年前にわれわれを包んだあの燃えるような熱いフンイ気を思いおこしたとすると、誰も感慨なしにはすまされないのであろう。いちばん重大なのは、この五年間を通じて、民主主義の形式を第一とする勢力が、民主主義の内容を第一とする勢力を圧倒したという事実である……国民の大部分は確かに敗戦によって、一方

⁽³⁴⁾ Lawrence Goodwyn, *Democratic Promise: The Populist moment in America*, New York: Oxford University Press, 1976, pp.542-3.

では解放感と安堵感とをとりもどした。しかし同時に、他方では幻滅感と疲労感にとらえられたことも否定しがたい事実である……新しい民主主義を実質的に勝利せしめるためには、それゆえに国民に抱かれた幻滅感を新しい希望に転ぜしめ、疲労感を着実に回復せしめるあらゆる手段が、新しい勢力の側から講ぜられねばならなかったのである……しかし不幸にもみずからの解放に酔い、みずからの目的に陶醉しきった代表者たちは、国民のために目的を実現する手段を着実にととのえる仕事よりも、みずからの目的やイデオロギーを国民の前で絶叫する仕事に自己満足を感じたのである……こうして敗戦から生じた国民の幻滅感と疲労感は、将来の結果を何一つ見とおす余裕のないままで、手近な欲望の、手段を選ばない実現に転化していったのである。……戦争の最後の瞬間にいたるまで、民主主義の勢力は国内で自分を組織し、支配組織を打ち破る動きを自発的に示すことができなかつた。これには、おそらくさまざまな原因を数えることができるであろうが、この事実はやはり動かしがたい事実として、日本の民主主義を方向づけたのである。それはまず何よりも、戦勝国の占領勢力が、一方では解放者として現れると同時に、他方では支配者として現れるという事実にも明瞭に認められる……たんなる支配者の交代は、それがたとえどれほどすぐれたものであっても、決して民主主義ということはできない。民主主義の最初にして最後の自信は、国民自身がみずからの支配者にほかならぬという自覚以外からは生じえないからである。民主主義の諸勢力が力をあわせて、この自覚の成長に働かないかぎり、ワクは依然として外側から課せられたワクにとどまり、国民の無力感も依然としてもとのままにとどまるであろう。しかしあたかもこの点において、新しい民主主義の代表者たちは、国民の自信が一朝にして爆発するかのような錯覚に捉えられていた。外側から国民に課せられたワクを一步一步国民がみずからの力で作りあげるワクに転化させ、ワクを自分で左右する力を国民の中に育てあげてゆくという困難な仕事は、回避されてしまったのである。」

久野の状況認識は、「民主主義の形式を第一とする勢力が、民主主義の内容を第一とする勢力を圧倒した」とする問題提起において、ポピュリズム運動が問題としたことと重なる。もし、ここで、ポピュリズム運動の経験を援用するなら、民主主義の内容を第一とする勢力に課された「仕事」は、久野がこの文章の最後で述べたように、「(民主主義の) ワクを自分で左右する力を国民の中に育てあげてゆく」ことに他ならない。そこで久野は、つぎのように続ける。

「何よりも必要なのは、民主主義勢力の最も深く、最も広い連合、あるいは協同を一步一步打ち立ててゆくことでなければならない。この協同をかりに《民主戦線》とよぶとすれば、日本の若い民主主義にとって何よりも必要なのは、民主戦線の理論と方法である……もしイデオロギーが民主戦線において重大な理論的基礎であるならば、民主戦線はおそらく最初から不可能となるはずである。なぜならイデオロギーを前面に出すかぎり、各党各派はそれが近い関係にある派であればあるだけ、激しく相互に反撥しあわざるをえない運命にあるからである。したがって民主戦線が成立するためには、各党各派の従来のイデオロギーがご破算にならざるをえないような《客観情勢の大転換》と、この転換に対する各党各派の率直な承認が先行しなけ

ればならないのである。日本の場合、客観情勢の大転換、いいかえると、前に指摘したような独自の諸条件の複合が成立していたにもかかわらず、この事実を各党各派が率直に承認し、従来のイデオロギーを民主主義の強化のためには放棄してもさしつかえないとする態度が成立しなかったのである……日本の民主主義的再建や、日本の平和的立場の確保といった本来超党派的な問題を党派的に解こうとするような態度からは、他のいかなる理論が生れて来ようとも、民主戦線の理論だけは決して生れえないであろう……したがって民主戦線の基礎は、客観情勢の大転換から生じる圧力である。理論上のルールは、協同のための行動のルールを介して必ず成立してくるのである。このルールの拡大や強化に必要な各党各派間の人間的信頼も必ず生れ出てくるのである。協同のルールと人間的信頼を通じて、政策協定は、その結果として成立するのである。政策協定を実践した結果として、協同のルールが生まれ、人間的信頼が育ってゆくのでは決していない⁽³⁵⁾。」

この久野が、「民主主義勢力」に課した仕事は、そのまま、この時期、高野総評が、職場闘争からぐるみ闘争、諸種の集会や大会からカンパニア活動にいたるまで、ありとあらゆる機会をとらえては、連帯文化、あるいは高野のことばでいえば、労働者のモラルの定着につとめた理由になっている。それは「協同のルール」をつくりだすための、主体的な体験の共有と、それによる共同的主体の確認作業であったことが、うかがわれる。そのなかで、次に見る多田道太郎の戦後大衆文化運動論は、国民文化会議を含む、当時の文化戦線が、とりわけこの役割をになったことを、裏書きしている。

「お客はただ口をポカンと開けて芸を受取るだけの存在ではない。お客の表情、まなざし、溜息、あくび、拍手——要するにお客の息吹きが芸人ないし芸術家に吹きかけられる。芸術家の靈感（インスピレーション）とはお客から吹きかけられる息吹き（インスピレーション）のことであった……送り手と受け手のこのように深く確かな共感共同体をかりにコミュニオンと呼ぼう。コミュニオンは芸術の草の根であったし、今後も芸術が、思いもつかぬ別種のものに変貌しないかぎり、それはそうでありつづける。しかし、巨大な大衆が文化の受け手となって登場してからは……芸術の「原型」に接しうるのは少数の人びとであり、多数者は「複製」で満足する。安価で手軽というのが、「今のお客」の要求だ。寄席や演奏会で原型に接するよりも、レコード・ラジオ・テレビでの「複製芸術」で満足する……しかし複製芸術の時代になるとあのコミュニオンはどうなるのか。芸術家に息吹きを与え、芸術家を芸術家たらしめていたあのコミュニティは。芸人ないし芸術家がテレビ・カメラの前に立つ時、かれの受取るのは観客の息吹きではなく、物理的にのみ熱っぽいスタジオの照明である。かれが友とすべきコミュニオンの連中は数キロないし数十キロのかなたで沈黙している。受け手もまた、決して手のとどこかぬ送り手に対して絶望的に——ということはコミュニオンの空白の中で、共感し反発して

(35) 久野取「戦後の民主勢力 その後退からの脱却」（原題「民主勢力の後退からの脱却」『日本評論』1951年6月号）『戦後民主主義』東京、毎日新聞社、1979年所収、7、11、13～6、24～7頁。

いるのだ……問題はコミュニオンをかたちづけていた受け手集団の分解だ。ダンチに住むわたしの目の前にはたくさんの規格化された窓が開かれている。夜になるとその部分が青白く光る。わたしの家庭と同じようにテレビを見ているのだ。穴居時代の人類が洞穴の奥深くからおそるおそる外界をのぞいていたように、わたしがテレビ画面に拍手しても、それは他の洞窟の主人の拍手と和することはない……考えてみれば、労働者、消費者、ひとりひとりが、連帯感をもたず、巨大な一つの資本の意志に従順であるとき、その有様かたちは、複製芸術の受け手ひとりひとりが互いに連帯感をもたず、しかも一つの画面に眺め入っている有様かたちと、いかにも似通っている。」

多田のこの文章は、50年代のおわりに書かれている。描かれた状況は、高野総評が試みたはずの、体験の共有と共同的主体の確認は、民衆の民主主義文化を深めるにはいたらなかった、あるいは、いったん深まったとしても、それは風化し、協同のルールの基盤は、かたまらなかつたようにもみえる。

けれども、ここでふたたび、グッドウィンのポピュリズムの運動文化論をおもいだされねばならない。かれらの運動に意味があったのは、直近におけるその試み自体の成否ではなく、その試みが提示した、民衆がおちいった文化の問題状況を変えることの容易ならざること、そして、にもかかわらずそれをなしとげようとする、民主主義運動の覚悟と、その真摯な態度にうつしだされる運動文化の可能性においてであった。

だからこそ、ここで高野総評が促進しようとした運動文化のありようを、ここで確認することには、大きな意味がある。多田は続ける。

「戦後日本において前衛政党、労働組合、消費協同組合などの組織が被支配者の共同の利益を守るために、さまざまな動きをしめした。文化の面では、それらの運動に微妙に見合うかたちで、またそれらに刺激されながら、戦前にはなかった規模で、大衆文化運動が行なわれた。昭和二十一年ごろから労働組合が中心になって推進した文化運動、昭和二十五、六年から各地の職場で群生したサークル運動（綴り方、コーラス、映画、読書などのサークル）、この二つをまとめて大衆文化運動と呼ぼう……映画、音楽などの芸術についていえば、芸術に対する個人の反応、情緒は、ひとによってさまざまであり、また非合理的であり……それら情緒をまとめる一定の組織をもちにくい。寄席のお客のように「気合が通じ合」っても、その気合によって成立したコミュニオンは不定形で一時的なものだ。非合理的であり不定形かつ一時的な個人の情緒を、どのようにして合理的、定形かつ永続的な組織にすることができるか。これが大衆文化運動の組織づくりの基本問題である。いやしかし、それより前にどうして個人の情緒を組織化する必要があるのか。これは失われ分解しつつあるコミュニオンを新しい原則によって再編するための運動であり、その底には、みんなでいっしょに芸術文化を受けとめ、受けてのつながりから発する息吹きを芸術の送り手、創造者に伝えようという願望がある。その願望が人びとを情緒の組織化の方向におし進めているのである。戦後日本の大衆文化運動は、まったく新しいいくつかの面をもつ。しかし運動の底にあって、運動をつき上げているものは、むか

しながらのコミュニオンへの願望であった。むかしながらの願望がむかしながらのかたちでは実現できなくなったとき、願望は戦後十五年間、新しい(ママ)自分のかたちを模索しつづけたといえる⁽³⁶⁾。』

ここで、多田がいう「失われ分解しつつあるコミュニオン」というものを、事実として存在の有無を確認できるものから、ポピュリズムがあらわした「民主主義の約束」として、つまり民主主義の内容として、本来あるべきものととらえ、そこまでをも含めた場合、多田のいう「情緒の組織化」とは、まさしく、これまでみてきた、形式民主主義において、民主主義の内容を自覚的に創造しようとする、「被支配者」の運動文化の内実に、ふさわしいものであることがわかる。

もう一点、多田の言説で指摘しておくべきなのは、大衆文化運動の成立にとって、芸術家の側からの、共感のコミュニオンを再建することへの、強い関心が不可欠ではなかったか、という示唆である。

このことは、民主主義運動という、枠組みをはめる以前に、芸術家の側、あるいは知的エリート全般に、当時の混沌とした状況のなかで、創作活動をすすめるのに、受け手の息吹きへの欲求が、通常よりも高まっていたのではないかという推測を促す。

というのも、きわめて広範な分野にまたがり、さまざまな背景をもつ、おびただしい数の芸術家や、知的エリートが、国民文化会議やその関連の活動に参加し、そしてまた、一定期間を経て、そのなかの多くの者が運動をはなれ、芸術家として多方面で活躍している理由が、受け手の民主的な欲求と、運動を推進した側の努力だけでは、説明がつかない部分があるからである。

さらに、多田の大衆文化活動の組織的な由来に関する説明は、国民文化会議には、いくつかの側面で、歴史的な連続性が存在することを、さし示している。当然そこには、戦前左翼の文化活動からの人的、組織的なつながりというものが含まれる。また過去の運動体験の復活や、外国モデルの模倣という側面もある⁽³⁷⁾。

これらの歴史的連続性は、同時に、戦後に新たにもたらされた条件というものも、あきらかにする。その意味で、国民文化会議のみならず、高野総評、ひいては総評全体を牽引した、国労の存在は、あらためて多面的な考察が加えられてよからう。

全通、全電通とならんで、戦前から戦後まもない時期にかけて、経済的理由から進学がかなわなかった、地方の優秀な青年に、その能力と気力を思う存分発揮する場を与えた国労は、文化面においても、戦前の国鉄内での蓄積の上に、早い段階から活動がさかんであった。

たとえば、1952年に編纂された第一回文芸年度賞の作品群は、小説、戯曲、評論、詩、短歌、俳句、川柳、漫画と、すでに幅広いジャンルにわたっていたが、4年後の第三回文芸年度賞では、ルポ、

⁽³⁶⁾ 多田道太郎「大衆文化運動」『近代日本思想史講座・5』東京：筑摩書房、1960年所収、366～70頁。

⁽³⁷⁾ たとえば、当時、最もさかんな活動のひとつであった歌声運動について、そのリーダーの関鑑子に関する以下の文献を参照。関鑑子『歌ごえに魅せられて』東京：音楽センター、1971年。宮田新平『だれが風を見たでしょう—ボランティアの原点・東大セツルメント物語』東京：文藝春秋、1995年。関鑑子追想集編集委員会編『大きな紅ばら 関鑑子追想集 伝記関鑑子』東京：大空社、1996年。

小品、随筆がくわわり、評者によれば、いずれの作品もそのレベルが、格段にあがったという⁽³⁸⁾。

けれども、この年度賞に選ばれた作者の職場を一瞥したとき、本社の女性の事務職から、さいはての駅務員にいたるまで、全国津々浦々の、あらゆる職場に、文化運動がゆきわたり、職場における闘争の組織化とならんで、「情緒の組織化」がすすみ、それにこたえて、多彩な人材が輩出されていたことがわかる。

同時に、この全国にはりめぐらされたこの鉄道網は、職員の地縁・血縁を介して、それぞれの地元、運動文化の「伝導ベルト」の役割を果たしたと思われる。その意味で、高野総評を含め、高度成長以前の労働運動の産業構成は、従来の政治経済的な観点からだけではなく、こうした社会文化的なそれからの、再評価が必要と考える。

最後に多田の論稿は、戦後大衆文化運動のその後、とりわけ高度成長期以降の芸術、マスコミ、そして大衆文化全般との連続性が、いかなる形で進んだかに、関心を持たせる。さきに触れたように、芸術家や知的エリートには、音楽の芥川也寸志、文学の安部公房、社会学者の清水幾太郎をはじめ、国民文化会議に積極的に関わった後、そこから離れて自らの領域で、大成した者が少なくない。

同様なことは、マスコミでもあった。たとえば、歌謡曲の作詞家として、ヒットを飛ばし続けた、いずみたくは、歌ごえ運動の出身である。音楽運動の組織拠点であった労音は、60年代から70年代にかけてのフォークソング・ブームに、大きく貢献し⁽³⁹⁾、それらの曲にのせて、若者からの葉書や手紙を紹介し、人気を博した深夜放送は、ふたたび「共感のコミュニオン」をつくらんとしたかにみえる。こうした連続性をどう評価するか、高野総評のその後を考える上で、ひとつの大きなポイントとなろう⁽⁴⁰⁾。

さて、運動文化の観点から、高野総評の文化戦線をふりかえる節を、おえるにあたって、この時期、大きく高揚した、戦後の生活綴方、あるいは作文運動にふれたい。

この運動からは、国分一太郎をはじめ、一部の指導者は、国民文化会議の活動に直接関与した。また、運動の一部を構成した、大人のサークル活動としての生活記録運動⁽⁴¹⁾は、大衆文化運動の成果として、評価されてきた。

けれども、全体としての戦後の生活綴方運動は、内部でのとらえかたは別として、外部からは一

(38) 国鉄労働組合『第一回文芸年度賞作品集 国鉄文化六巻四号』1952年。同左『第三回文芸年度賞作品集 一九五六年国鉄文化別冊』1956年。

(39) たとえば、なぎら健彦『日本フォーク私的大全』東京：筑摩文庫、1999年を参照。

(40) なお、この戦後大衆文化運動の連続性、あるいは戦後大衆文化全般における継承性において、それがもっとも明瞭なのは映画の分野であろう。これについては、篠田徹「戦後の労働映画」『生活経済政策』編集部編『生活研ブックス五 労働運動—その今日と明日を問う』生活経済政策研究所所収。2000年。たとえば1961年のブルー・リボン賞に輝いた、吉永小百合主演の大ヒット映画、「キューポラのある街」において、主人公がハッピー・エンドへむかうときのせりふ、「一人が五歩すすむよりも、五人が一歩すすむほうが大事」は、50年代初期の国労のスローガンと酷似している。篠田徹「社民の根っこ」『生活経済政策』2005年5月号。

(41) たとえば、鶴見和子『鶴見和子曼荼羅：コレクション2（人の巻）日本人のライフ・ストーリー』東京：藤原書店、1998年を参照。

般に、子どもの教育問題としてあつかわれた。実際、日教組の年史をみても、また総評史をくくっても、また戦後労働運動史の文献をあたって、そこで、戦後の生活綴方運動が論じられることはない。

ところが、ここでみた運動文化の観点から、高野総評の文化戦線をながめたとき、「おなじことをしている自分たちを自覚」し、「(民主主義の) ワクを自分で左右する力を国民の中に育て」、そのなかに、「共感のコミュニオン」をつくりあげるための、「情緒の組織化」を、もっとも広く、深く、静かに、しかし熱くおこなったのは、この戦後の生活綴方運動ではなかっただろうか⁽⁴²⁾。

たとえば、独立直後の高野時代のまっただなか、小・中学校生向けに、全八巻からなる、一風変わった本がでる。題名は、『綴り方風土記』で、編集は国分一太郎、出版社は平凡社だった。1952年の秋から54年の春まで、北海道、東北、関東、東海・長野・山梨、関西、瀬戸内・四国、北陸・山陰、九州・琉球の各巻が、順じゅんに出される。

『綴り方風土記』は、いってみれば、子どもの地理の教材だが、この本には、ほかの教材とちがって、全部で五百人をこえる小・中学生がつくった作文と版画が、目次にしたがって、ならべられ、それに専門家による、章や節の内容についての、平易な説明文がついている。この本のただし書きによると、実際に使われた「何十倍をかぞえる作品」が送られてきたらしい。

各巻のはじめには、専門家の執筆協力者とならんで、本にのった作文と版画の作者である、子どもたちの名前と、学校、そしてクラスの先生の名前が書いてある。それら学校の名前と所在地をみると、これらの作品が、公立学校から、私立学校、そして在日朝鮮人の民族学校まで、文字通り、全国津々浦々から、送られてきたことがわかる。そして、これらの学校の先生たちの多くが、この時期、結成されたばかりの、日本作文の会と、それと二人三脚の関係にあった日本教育版画協会に組織化され、各地の作文の会と版画協会のメンバーが、各巻の編集を助けた⁽⁴³⁾。そしてはしがきである。

「これは第二巻・東北の巻です。北の土地東北、山の多い土地東北、ながい冬ごりの土地東北、雪や寒さとたたかう土地東北、ここにはきびしい自然とたたかってくらす、しんぼうづよいひとたちがすんでいます。その子どもたちがすんでいます。米の東北、まゆの東北、木炭の東北、つめたい海に魚をとる東北、ひろい原野に馬や牛をかう東北、ここには、はげしく働く父や母たちがすんでいます。その子どもたちがすんでいます。春をまつ土地東北、めずらしいコトバで、ボンボンとしゃべる土地東北、ここには、生活のゆたかさをもとめて、心のしんそこからのねがいを、しずかにつぶやく男や女たちがすんでいます。その子どもたちがすんで

(42) 戦前戦後をつうじた生活綴方運動については、日本作文の会編『生活綴方事典』東京：明治図書出版、1958年を参照。

(43) 1952年8月、日本作文の会は、岐阜県中津川市で第一回作文教育全国協議会を開催し、生活綴方の復興運動が一大組織をつくった。また戦後の生活綴方運動と切っても切り離せぬ関係にあった版画教育運動については、その指導者である大田耕士の遺稿集、平田隆一編『大田耕士著作集—教育版画のあゆみ—』五所川原市教育委員会、1999年を参照。

います。それで、この巻には、山に海に、田に畑に、町に、働く人たちの姿が、ことさら多くちりばめられることになりました。しんぼうづよい人たちのよろこびやかなしみの心が、ひとりでにじみでるようになりしました。東北の小・中学校のみなさんが、すみきった目で、それをつかまえてくれているからです。」

「これは第三巻、関東の巻です。東京都をはじめ、神奈川・埼玉・千葉・茨城・栃木・群馬の各県に住む小・中学校生が書いた綴方のほか、他県からこの地方に修学旅行にきたことのある中学生たちが書いた綴方なども使って、これをまとめました。関東地方は、わが国の政治・経済・文化の中心である東京のあるところだし、一ほうを海に、三ほうを山にかこまれた関東平野にまたがる他の県も、いまでは東京ときりはなして考えることはできません。住む人も多いし、その人たちの働きもさまざまだし、考え方もいろいろです。だから、ほんとうにこみいったところだといわなければなりません。たとえば、この巻で大きくページをとった京浜工業地帯などは、土地と人との関係よりも人と人の関係のほうが深いのです。そうかと思うと、利根川の水によってくらし、またその水害にくるしんでいる村むらでは、人と自然との関係が深いわけです。けれども、日本のいちばんひらけた地方にいてさえ、なぜ毎年毎年水害などに苦しんでいなければならないかと考えれば、これは世のなかのもんだいになります。この地方に住む小・中学校のみなさんは、こういうこみいった生活のなかについて、この風土記をつくってくれました。どんな関東篇ができるだろうと、心まちにしてくれたみなさんに、「この巻はほんとうにむずかしかった」ということを申しあげて、これをおとどけいたします。」

読んでみて、これが、ただの地理教材のはしがき、でないことがわかる。それは、子どもたちへの、独立日本の新しい「共感のコミュニオン」へのよびかけであり、大人たちに対する、「同じことをしている自分たちを自覚」し、「ワクを自分で左右する力を国民の中に育てる」ための、「情緒の組織化」を、子どもたちと行うという、生活綴方運動員たちの宣言文である。

この生活綴方運動員たちとは、全国の小・中学校（小学校が圧倒的に多いが）の先生であり、その子どもたちである。彼ら彼女らは、先生と生徒であると同時に、同じ運動員である。なぜなら、この運動は、「労働者のモラル」への、子どもを介した大人の覚醒を、めざしていたからである。東北の巻のはしがきにある、「しんぼうづよい人たち」「の心を」「小・中学生たちが」「つかまえた」とは、そういうことの一部であろう。

たしかに、この当時、日教組は日本最大の組合として、「逆コース」の矢面にたつて、「教え子をふたたび戦場に送るな」と、政府や文部省と、きわめて戦闘的にたたかい、高野総評の前衛部隊のひとつではあった。

けれども、当時の映画、『山びこ学校』や『人間の壁』が、あらわしていたように、組合の内部は、いろいろな事情がこみいっており、校長や親や地域とも、大きくすれちがうところがあり、そしてなによりも、さまざまな境遇にある、子どもたちをかかえて、現場の先生たちは、毎日をなやみ、もがいていた。

しかも、高校や中学の先生とちがい、小学校の先生は、戦前から、教員のなかでも、さまざまな面で、低いあつかいを受け、また教える上で、自由がなかった。そしていうまでもなく、女性の教

員の大半が、戦前からのももふくめて、この小学校の先生であった。婦人部をふくめて、日教組の運動で、幹部から現場にいたるまで、小学校の先生がもっとも戦闘的であったのは、けっしておどろくことではない⁽⁴⁴⁾。

おそらく、戦後の生活綴方運動は、こうした先生たちに、戦前以上に、自分たちの気持ちや願いを表現する、手段と空間をあたえたのであろう。と同時に、戦前の、民主主義教育の伝統をひきつぐこの運動は、独立日本の旅だちにあたって、戦争のために否定すべき戦前日本のなかで、再生にむけての貴重な運動遺産であった。

そのことはまた、この運動をになってきた小学校教員に、新生民主主義日本における、けん引役としての正統性をも、与えることとなったであろう。

このとき、戦後の生活綴方運動が、少なからぬ女性教師を巻き込んでいたことに、意味がある。当時の国民の気分を反映したであろう、戦後日本映画を論じるなかで、川本三郎は、当時の映画で何度も主人公となった、女性教師の役割をつぎのように分析する。

「教師であると同時に、彼女たちは、心やさしい母親であり、大地母神である。ときには賢い姉の役目も引受ける。だから、“教師は聖職者か労働者か”といったリアルな議論の外側に置かれる。戦後日本映画は、彼女たちを理想化することによって、戦争の悲惨な記憶を浄化しようとする。国家やイデオロギーがもろくも壊れたあと、その廃墟に、白いブラウスを着た美しい女の先生を立たせ、男に比べれば手の汚れていない彼女たちに、慰藉と再生の儀式的の担い手になってもらおうとする。男に比べればはるかにしっかりと日常の場に根づいている彼女たちの手で、“国破れて山河あり”という連続性を受け継いでもらおうとする⁽⁴⁵⁾。」

こうして、戦後の生活綴方運動は、当時の国民のあいだにあった、侵略戦争の加害者と被害者という二律背反な気分のなかで、そこから自らを無罪放免にすることなく、同時に、その過去をくりかえさぬ覚悟では、いささかも疑われることなく、久野のいう「協同のルール」を、草の根からつくりあげる、主体的なとりくみとして、広がることができた⁽⁴⁶⁾。

こうした、小学校教員の特殊な立場の解明は、戦前から戦後において、手のひらを返した、その体制順応的な姿勢が批判されてきた、教師全般に対する、より複雑な理解を進めるかもしれない。いずれにせよ、さきの国労同様、教員という、政治経済的にも、社会文化的にも、労働運動のみならず、社会のゆくえにも、鍵となる集団の理解は、重要である⁽⁴⁷⁾。

(44) Benjamin C. Duke, *Japan's Militant Teachers: A history of the left-wing teachers' movement*, Honolulu: An East-West Center Book, The University Press of Hawaii, 1973, p.195.

(45) 川本三郎『今ひとたびの戦後日本映画』中公文庫、2000年、191～2頁。

(46) 「聖職」対「労働者」という、その後単純化される二項対立な発想を超えた、当時の生活綴方運動にちかい教師観については、国分一太郎『教師』岩波新書、1956年を参照。

(47) この点で、比較研究として、以下の文献が有用と思われる。Maria Lorena Cook, *Organizing Dissent: Unions, the state, and the democratic teachers' movement in Mexico*, University Park: Pennsylvania University Press, 1996; John P. Synott, *Teacher Unions, Social Movements, and the Politics of Education in Asia: South Korea, Taiwan, and the Philippines*, Aldershot: Ashgate, 2002.

ちなみに、『綴り方風土記』の発行元が、職人見習いなど、働きながら、ほとんど独学で小学校教員になったのち、アナキストとして、戦前の教員組合運動の創設者のひとりとなった下中弥三郎が率いる平凡社であったことも、おぼえていていいだろう。

ただ、ここで注意しておくべき点がある。というのも、生活綴方は、とすればローカルな視点が強調され、そのグローバルな側面が、忘れられるからである。実際、『綴り方風土記』は、このローカルな視点から、ナショナルなそれを、下からつくりあげる、つまり、それぞれの生活文化を知り、それを尊重しつつ、たがいの共通点を発見し、そこから同じ問題を共有する仲間として、新生日本のための協同の可能性をさぐる、それが編纂の意図であった。

同時にそれは、グローバルな拡大も意図されていた。国分は、当時著した本の末尾を、つぎのように結んでいる。

「このようにして、全人類的であるとともに、日本的な教育を行なおうとする人びとは、「子どもたちは、自分たちの民族的独立については何ものをも失うことなしに、また自分たちの民族的文化や、自分自身の民族が世界の文明に寄与し、平和のために寄与してきた遺産の何物をも失うことなしに、他の諸民族を尊敬し、そして自分の国の人びとと彼らの民族的独立とを愛するという考え方を教育されなければならない」という世界教員会議（1953年、ウィーン）の精神を、この日本に具体化しようとしています。このことは、民族問題がのしかかっている国のインテリゲンチヤである日本の教師に負わされた大きな課題です⁽⁴⁸⁾。」

こうした生活綴方運動の指導者の考えと、平仄を合わせるように、平凡社は『綴り方風土記』に続いて、そのスタッフとスタイルをほぼ継承しながら、『世界の子ども』全15巻（1955～57）を発刊した。

ただし、今回の企画では、世界各国の子どもの作文や絵画を集めるのに、戦前からのエスペランティストによる通信活動に、大きく依存した。実際に、多くの巻で、編集協力者として、大使館や現地の教員組合とならんで、各国のエスペラント協会やエスペランティストと思われる名が見られる⁽⁴⁹⁾。

高野総評の運動文化は、戦後の生活綴方運動にみられるように、この時代に、人びとが、身のまわりにはじまって、家族のこと、友だちのこと、仕事のこと、くらしのこと、そして、日本のこと、世界のことについて、知っていること、考えること、感じることを伝えようとするとき、そして、そこから、「協同のルール」をつくりだそうとするとき、それらが依存する「共感のコミュニオン」の形成につとめた。

(48) 国分一太郎『教師』228頁。

(49) 大島義夫・宮本正男『反体制エスペラント運動史』三省堂、1974年、316～8頁。なお『世界の子ども』のひとつの雛形に、このシリーズの編集にも大きく貢献した、栗栖継の『同じ太陽が世界を照らしている』京都：北大路書房と『世界の声』東京：三一書房、いずれも1949年がある。

その意味で、高野総評の運動文化がつくりだそうとしたものは、まさにレイモンド・ウィリアムズが、ある時代の文化というものをあらわすときに用いた、「感覚構造」(structure of feeling) というものに、匹敵するものではなからうか⁽⁵⁰⁾。

5 社会運動の世界史のなかの高野総評

いましがたみた、エスペランティストの存在がしめすように、またよくいわれる、生活綴り方運動そのものの多様な背景が、あきらかにするように、高野総評のまわりには、さまざまな思想や運動が、折りかさなってきた、活動家の堆積層がみられる。

たしかに、清水慎三がとらえたように、高野総評は、その後60年代にかけて、職場と地域における活動家群の輩出に、大きく貢献した。また、その系譜を、総評系を否定的に継承した、民間大企業の職場活動家や、組合から生協運動など、他の社会運動に転出した地域活動家にまで、ひろげるならば、高野総評の蒔いた種の歴史的意義が、いっそう増してこよう。

けれども、それを、高野総評が独力でなしたと、考えるのは、間違いであろう。むしろ、この面で、高野総評がなした、卓抜した努力というものは、みとめられねばならない。とはいえ、高野総評が、そうした努力をなすにあたって、そもそも、そうした活動家や活動自体の、あるいは、そういう活動家や活動についての考え方の、歴史的堆積というものが、一定程度なくてはなるまい。

活動家や運動、その思想の蓄積、という観点からみたとき、高野総評とは、おそらく、それまで自力で存在することがむずかしかったり、べつの形をよそおっていた、活動家や運動、その思想が、ふたたび表面にあらわれるための、いわば地下水脈にはけ口を与える、社会運動の媒介機構ではなかったのか。だとすれば、その水脈は、どこからどこへ流れていくのか、この節の題には、こうした関心がこめられている。

具体的に言おう。高野総評とは、第一次大戦以降、一部の例外的な地域をのぞいて、日本を含む世界のいたるところで、労働運動を中心に、社会運動の多くの領域にかかわっていた活動家たちが、ソーシャリストとコミニストの党派陣営に、収斂させられていったなかで、いわば、両陣営にまたがる地下水脈、となっていた運動系譜あるいは伝統、とりわけ、サンディカリズムという多義的な呼称のそれに、ふたたび、広大な「共感のコミュニオン」をめざしながら、左翼運動の草の根大連合の先導役として、歴史に登場するための、格好の檜舞台を提供したのではなかったか⁽⁵¹⁾。

それはまた、戦後あの時期に、突如出現したというより、それ以前、とりわけ戦前に、「予行演習」があったのではないか。さらに言えば、そういう運動の伝統は、一定の条件下で、周期的にあ

(50) Raymond Williams, *The Long Revolution*, London: The Hogarth Press, 1992, p. 48.

(51) 第一次大戦前後におけるサンディカリズムの動向については、たとえば、Eric J Hobsbaum, *Bolshevism and Anarchists*, in *Revolutionaries: Contemporary Essays*, New York: Pantheon Books, 1973; James E. Cronin and Carmen Sirianni eds., *Work, Community, and Power: The experience of labor in Europe and America, 1900-1925*, Philadelphia: Temple University Press, 1983 を参照。

らわれるのではないか。そして、その発現は、日本にかぎったことではないのではないか。だとすれば、高野総評は、労働運動として「異端」ではなく、これまではサンディカリストという言い方でしか、表されてこなかったが、これからは、社会運動的労働組合、あるいは社会運動的労働運動と呼ぶべき、国境を越えた活動の伝統において、ひとつの「正統」な存在なのではないか。

そこで、ここではもう一度、第一節でふれた、高野のイニシアチブ・グループや猪俣の横断左翼・機能前衛論にみられた、アメリカン・サンディカリズムとのつながり、というものについて考えよう⁽⁵²⁾。

猪俣・高野とアメリカン・サンディカリズムの、より直接的な系譜は、たとえば次のような状況証拠でたどれる。

知られるように、猪俣は、早稲田から留学した米国で、片山潜と接触し、ニューヨークで在米日本人社会主義団の一員として、アメリカ共産党結成に、多少とも関わった。帰国後、早稲田の教壇にもどった猪俣は、大山郁夫の紹介で高野実と会い、その後20年ちかく、ふたりの固い同志的師弟関係がはじまる。

このとき猪俣が高野に手渡したアメリカ共産党関連の文献に、ウィリアム・フォスターが、自身が率いた第一次大戦直後の全米鉄鋼争議について書いた、『大鉄鋼スト』⁽⁵³⁾があった。

この本は、それまでアメリカのサンディカリスト運動の中心人物だったフォスターが、アメリカ共産党に入党する直前に書かれた。けれども、この著作の目的は、当時、既成組合に対抗する革命的労働運動に力をいれ、「二重組合戦術」に傾く仲間のサンディカリストに対して、あくまで、既成組合を含め労働者が集まる場所で、「戦闘的少数派」として活動しながら、労働者集団の「中からの左翼化」をめざし、その動きを組織を越えてつなげながら、労働運動全体を戦闘化させる戦術の重要性を訴えることだった。

そしてモスクワの同意のもと、アメリカ共産党は、フォスターとともに、この「戦闘的少数派」による「中からの左翼化」を、自分たちの労働運動戦術として、受け入れる。

猪俣の「機能前衛」「横断左翼」と高野の「イニシアチブ・グループ」の狙いも、このフォスターの戦術のそれと、きわめてよく似ていた。

もっとも、フォスターは、その後アメリカ共産党のリーダーとして、日本でも1950年代まで、共産党関係者の間ではよく知られ、その著作の多くが翻訳されるとともに、かれの労働運動戦術も、日本の左翼労働運動のなかで定着したという解釈がある⁽⁵⁴⁾。

けれども、このフォスターの労働運動戦術の受容には、より間接的で、すそのの広い側面があったことも、事実である。まず東京で、猪俣が高野にフォスターの本を手渡すのと前後して、大阪では荒畑寒村が、自分が主催する『日本労働新聞』に、『大鉄鋼スト』の抄訳を載せている。その狙いは、フォスターのそれとまさに平行して、当時直接行動に傾く、大杉らサンディカリストらに対

⁽⁵²⁾ 以下は、篠田徹「トランス・パシフィック・サンディカリズム」『生活経済政策』2005年、4月号を参照。

⁽⁵³⁾ William Z. Foster, *The Great Steel Strike And Its Lessons*, New York: B. W. Huebsch, 1920.

⁽⁵⁴⁾ たとえば、ウィリアム・Z. フォスター（山辺健太郎訳）『アメリカ政治史（上下）』東京：大月書店、1954、5年を参照。

して、労働者からうきあがることの危険性を説くことにあった⁽⁵⁵⁾。

本人も認めるように、この抄訳をひとつのきっかけに、荒畑はこの後「ボル化」してゆくのだが、この「ボル化」とは何を意味するのか。フォスターが、かれのサンディカリズムを捨てずに入党したとすれば、ここはよく考えねばなるまい⁽⁵⁶⁾。

さらに大阪では、荒畑のもとに、第一次大戦直後、頻発した労働争議で解雇された、「野武士組」と称する、若い組合活動家の「戦闘的少数派」が集まっていた。そしてこの一部は、同時にまた大杉のグループとも、交わっており、そこには、アメリカ西海岸で、アメリカン・サンディカリストのウォブリーズに加わり、フリー・スピーチ運動などの戦術を日本にもちかえて、大阪で借家人運動など、さまざまな活動にそれを転用したりしてもいた。

この野武士組と同様の戦闘的少数派のグループは、その後、総同盟をはじめとする既成組合で「中からの左翼化」をめざし、離合集散を重ねる。その後、総同盟から別れ、直接行動とマイノリティとの連携が目立った全労をひとつのブリッジにしながら、労働争議だけでなく、旺盛な文化活動、消費組合や無産者医療、時には選挙を含め、さまざまな活動をつうじた横の連携を、大阪一帯、それもいわゆる「不良住宅」や家内工業が密集する労働者街を中心に、半ば無意識的に広げていった。

ここへ、左からの労働戦線統一と、それにもとづく広範な反戦反ファシズム戦線の樹立という構想をもちながら、東京と大阪の連携をめざして、猪俣・高野のネットワークが、かぶさってくる。そして、これが30年代半ばに、大阪港南を発端にした労働戦線統一と、これに農民運動や他の社会運動が合同して、社会大衆党の躍進を、下から組織的に支えていった⁽⁵⁷⁾。

この動きの背景に、アメリカの野坂参三からの「日本型人民戦線」樹立のはたらきかけがあったことは、よく知られる。またこうした野坂の働きかけを含めて、37年の日中戦争前夜に、民政党や一部軍部・元老を含めた、中道左翼あるいは社民リベラルな和平政権の可能性があったことも、最近では指摘される⁽⁵⁸⁾。けれども、そこへいたるまでの、第一次大戦前後からの、草の根における戦闘的少数派集団の活動の蓄積、それも、従来労働運動の範疇にはいれられてこなかった、多様な社会運動との接点というものは、忘れられてはなるまい。

こうしてみると、高野自身が象徴するように、高野総評とは、その運動のなりたちにおいて、あるいは運動の「古層」という意味で、その後の太田・岩井総評よりも、戦前の労働運動との連続性において、考えるべき点が多いのではないか。そしてアメリカン・サンディカリズム、あるいはフォスタリズムとの関連で浮きあがってくる、この新しい文脈では、その視野を日本にのみ、とどめ

(55) 荒畑寒村『寒村自伝』東京：論争社、1960年。

(56) アメリカ共産党ならびにコミンテルンとフォスターのサンディカリズム、あるいはフォスタリズムの軌轢については、Edward P. Johanningsmeier, *Forging American Communism: The Life of William Z. Foster*, Princeton: Princeton University Press, 1994を参照。

(57) たとえば、渡部徹・木村敏男監修『大阪社会労働運動史 戦前編・上下』大阪社会運動協会、1986、9年を参照。

(58) たとえば、坂野潤治『昭和史の決定的瞬間』ちくま新書、2004年を参照。

ておくことができない。

実は、フォスタリズムは、ニュー・ディール期のアメリカ労働運動の高揚に、草の根の活動家の面から、大きく貢献している。皮肉にも、それはフォスターが、政治的のみならず健康上の理由からも、アメリカ共産党内で、指導権を制約される大恐慌時代に起る。

当時、20年代末、アメリカ共産党は、それまでの「中からの左翼化」戦術から、事実上の二重組合戦術に移行する。けれども既存組合が大幅に組織も活動も縮小させているこの時期、それは、ほかの組織がとりくまない、あるいはとりくめない労働者の困難に、もっとも直接的にかかわりあうこととなった。

失業者の組織化や失業・福祉手当の給付請求、家賃滞納による強制的な立ち退きの実力阻止にはじまり、労働者やその家族、あるいは地域の身近な問題をソーシャル・ワーカーや福祉団体、そして教会などと協力しながら、ひとつひとつ解決する一方、これらの多くの活動が、それまで組合ももっとも縁の薄かった、黒人労働者やその家族のために展開されるなかで、共産党の活動家は、有能なオルグとして、労働者の間で高い評価を得ていく。

これに目をつけたのが、労働総同盟（AFL）から別れて産別会議（CIO）を結成したばかりの、炭労委員長のリイスで、かれは共産党のオルグを大量に雇い入れ、鉄鋼、食肉をはじめ、新設の産業別組織の最前線に登用して、大きな成果を上げる⁽⁵⁹⁾。

そして、この共産党や仲間のオルグの間で、バイブルのように読まれたのが、当時フォスターが『大鉄鋼スト』を下敷きに、いくつも書き連ねた組織化のための小冊子だった。こうしてフォスターは、本人の意思とはうらはらに、CIOが基盤となった人民戦線活動家の間で、いわばヒーローとなった⁽⁶⁰⁾。

ここから、試みに言えることは、第一次大戦前後から日中戦争直前まで、アメリカン・サンディカリズム、あるいはフォスタリズムは、太平洋をまたいで、平行的に発展していた、あるいは双方を舞台に、ひとつの物語をつむいでいた、とも考えられる。では、アメリカン・サンディカリズムの遍歴は、戦後に続くのか。

戦前の日米におけるフォスタリズムの展開が、平行的な発展軌道を描いたとすれば、戦後のそれは、以下仮説の如く、ブーメラン効果のそれかもしれない。

- ① 戦時中から戦後、国内冷戦体制ができるまで、対日労働政策は、日本でアメリカン・サンディカリズムの凍結を解除し、米国では、大衆的な労働運動経験⁽⁶¹⁾を通じて、後の反差別・反戦運動に種を残した。
- ② 冷戦本格化で、アメリカン・サンディカリズムは、米国内で凍結される一方、高野総評の出現で、日本で再び開花する。その高野総評の影響は、世界的な反植民地運動の一翼を担う形で、

(59) たとえば、長沼秀世『アメリカの社会運動－CIO史の研究』彩流社、2004年、特に第7章を参照。

(60) Lizabeth Cohen, *Making A New Deal: Industrial Workers in Chicago, 1919-1939*, Cambridge: Cambridge University Press, 1990, p.341.

(61) たとえば、George Lipsitz, *Rainbow At Midnight: Labor and Culture in the 1940s*, Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1994 を参照。

米国内⁽⁶²⁾に還流する⁽⁶³⁾。

- ③ 60年代後半, 下からの戦闘的労働運動の形で, 両国にアメリカン・サンディカリズムが再現する⁽⁶⁴⁾。

これらの仮説については, 戦前戦後をつうじて, 両国での, 前述した社・共の党派間競争の増減や, 両陣営文化の強弱との関係に着目すべきであろう⁽⁶⁵⁾。また, 戦前も含め, 中国などアジア太平洋を包摂した, 広域の労働政治分析の観点が必要となろう⁽⁶⁶⁾。

ところで, ここまで文脈を広げるなら, ここでいうサンディカリズムとは何か, を考えぬ訳にはいかない。とりわけ, 「戦闘的少数派」というありように注目したとき, そこには, 従来のアナルコ・サンディカリストや革命的サンディカリストよりも, 拡大された活動家群の総体が考えられる⁽⁶⁷⁾。その場合, たとえば, モントゴメリーの次の表現は, 大変重要と思われる。

「多くの労働者は, 毎日の出来事や, 世の中でくり返される, 彼ら彼女らに対する, あからさまな扱いのちがいを目の当たりにして, 大事なことを学んできた。すなわち, 確かに世の中には, 個人として, 社会的な影響力をふるうことができる人たちがいるけれども, 自分たち労働者には, 一致協力して行動するほかに, 自分たちの生活でほしいものを手にいれることはできないのだということ。家族のきずな, 移民同士, 若い女工, 職人, スト仲間, 投票者, 暴徒などなど, 労働者がいっしょになって動くとき, そうするには, それぞれ, いろいろな理由があって, ひとまとめにすることは, むずかしいけれども, それでも, 個人主義というものは, 生れ育ちのいい, 金持ちたちにしか, 関係のないことだと, 固く思っている点ではいっしょである。階級意識というものは, 日常生活のなかから, 自然とうまれでるものではない。そこには, 働きかけというものがなくてはならない。労働者階級の活動家たち, あるいは他の階級の出身ではあるけれども, 労働者の運動に大いに触発されて活動家となった人たち, これらの人

(62) たとえば, Penny M. Von Eschen, *Race Against Empire: Black Americans and Anticolonialism, 1937-1957*, Ithaca and London: Cornell University Press, 1997 を参照。

(63) たとえば, Toru Shinoda, “The Reincarnation of ‘Trans-Pacific Radicalism’?: Singing labor movement in Japan and the United States,” a paper presented in the 21st Annual North American Labor History Conference, October 21-23, 1999, Wayne State University, Detroit を参照。

(64) たとえば, Kim Moody, *Injury to All: The decline of American unionism*, London and New York: Verso, 1988; 戸塚, 中西, 兵藤, 山本『日本における「新左翼」の労働運動(上下)』東京: 東京大学出版会, 1976年を参照。

(65) この点で, 戦間期, 対立する社共間の架橋役をめざした左派社会主義者への注目は重要と思われる。この点は, たとえば, Lonny E. Carlile, *Divisions of Labor: Globality, Ideology, and War in the Shaping of the Japanese Labor Movement*, Honolulu: University of Hawaii Press, 2005, pp. 8-18 を参照。

(66) たとえば, 戦後中国とサンディカリズムについては, 石井知章「初期社会主義段階における労働組合の思想的位置」『明治大学社会科学研究所紀要』第43巻第2号, 2005年3月を参照。

(67) たとえば, Robert Holton, *British Syndicalism, 1900-1914*, London: Pluto Press, 1976; John M. Hart, *Anarchism and the Mexican Working Class, 1860-1931*, Austin: University of Texas Press, 1978 を参照。

たちは、働く人びとの間に、いっしょに何かをする感覚と、そこに、ともにめざすべきものがあるという意識をもたせようと、たゆまぬ努力をつづけてきた。そのために、これらの活動家たちは、ある者は労働者に語りかけ、ビラをまき、ストライキを手だすけし、集会をおこなってきた。またある者は、読書会をひらき、軍隊式の教練をもよおし、ダンスや運動、コーラスのクラブをつくり、協同組合をおこして、お店をやってきた。これらの活動家たちにとって、これらの活動は、それ自体をうまくやろうと思っていたのはもちろん、できうれば、それらをつうじて、参加する労働者やその家族、そしてコミュニティ全体が、社会というものの見方、「労働者の解放」にいたる道のりについての考え方を、わかちあえるようになることを、望んだのである。（このごろさかんに言われる、一般民衆の動向やその背景に注目する：篠田）「下からの歴史」(history of bottom up) に夢中になったり、あいもかわらず偉大な指導者の功績にこだわっていると、20世紀のサンディカリストが、「戦闘的少数派」(Militant Minority) と呼んだ人々、すなわち、職場の同僚や近所の住人を、自分たちが何をすべきかを自覚した労働者階級へと、つなぎとめようと、必死にがんばった彼ら彼女たちの、こうした決定的な役割というものが、ぼやけてしまう⁽⁶⁸⁾。」

モントゴメリーのこの文章は、サンディカリストの外延に広がる、より普遍的かつ歴史的な活動家群の存在を示唆する。それはグラムシが言う「有機的知識人 (Organic Intellectuals)」ではないか。それを、リブジッツは、次のように説明する。

「グラムシによれば、有機的知識人は、「知識人」として、公式の地位や雇用を得ているわけではない。けれども有機的知識人は、みずからが属する階級がもつ、もろもろの思想や熱望を方向づけている。その有機的知識人が行なう活動のなかで、欠かせないのが、社会へ働きかけるため行動することである。有機的知識人が行なうのは、世界を分析し、解釈することだけではない。有機的知識人は、社会にむかって主張するなかで、己が思想をかたちづくり、それを多くの者に語りかける。グラムシは言う。「この新しい知識人のありようというものは、その場かぎりの煽動のために、ただ雄弁であればそれでいい、というものでは、もはやない。この新しい知識人は、運動の建設者として、組織者として、そして「永遠の説得者」として、人びとの実際の生活のなかに、深く関わっていかねばならない」。後援者や大学、あるいは文化団体に支えられている伝統的な知識人というものは、この人びとの実際の生活というものから、離れていられる。けれども、有機的知識人は、世界を変えようとして、はじめて世界を学ぶのであり、また、自分が属する社会集団には、何が必要で、何を欲しているのかという観点から、

(68) David Montgomery, *The Fall of the House of Labor: The workplace, the state, and American labor activism, 1865-1925*, Cambridge: Cambridge University Press, 1987, p.2.

世界を学んで、はじめて世界を変えるのである⁽⁶⁹⁾。』

戦闘の少数派を、こうした意味で、有機的知識人と考えて、さしつかえなかろう。ではこれを、日本の文脈で、どこにむすびつけるか。ここではまだ、有意義と思われる文献を、二、三あげることしかできない⁽⁷⁰⁾。おそらく、その文脈が明らかになるところこそ、この研究で、高野総評のすそ野が、歴史の地平と、最後にしっかりと、重なるところとなろう。

おわりに

すでにみてきたように、のこされた課題は、きわめて大きい。けれども、それらには、共通した問題がある。つまり、この研究ノートが何度も指摘したように、これまで、高野総評の理解は、富士山にたとえて言えば、遠くからでも見える、有名な五合目あたりから上の部分で、その広大なすそ野には、なかなか目がいかなかった。

このすそ野に目をやるというのは、高野総評が扱って以て立っていた部分が、それぞれ、どういう状況にあったかを、そちらの側に立って、ながめることである。そして、そうした、高野総評を成り立たしめていた、さまざまな事情を理解しようとするとき、高野総評の歴史的意味、というものが、これまでの、既存の労働運動論からみてきたよりも、複雑かつ重層的にみえてくる。

そうすると、こんどは、高野総評をつうじて、別の選択肢を含め、それぞれの部分が成り立たしめていた、当時の日本のありかた全体、あるいは日本と世界のつながり、そして今日も潜在的には存在しつづけているであろう、そのときあった、いまとはちがった日本や世界になる可能性というものも、うきあがってくる。

つまり、これまで「普遍」、と考えられてきた労働運動の枠から、大きく「はみだした」とされる高野総評を、社会運動的労働組合論という、労働運動における「もう一つの普遍」の可能性をもつ枠から、考察することは、高野総評を含め、それら類似の存在が、もはや「特異」でなくなる理論的、歴史的、実践的文脈を、発見することにほかならない。社会運動的労働組合論の意義とは、まさにそこにある。

(しのだ・とおる 早稲田大学社会科学総合学術院教授)

(69) George Lipsitz, *A Life In The Struggle: Ivory Perry and the culture of opposition, revised edition*, Philadelphia: Temple University Press, 1988, pp. 9-10, 文中引用は, Quintin Hoare and Geoffrey Nowell Smith eds., *Antonio Gramsci, Selections from the Prison Notebooks*, New York: International Publishers, 1971, pp. 9-10から。

(70) たとえば、1989年から社会評論社から刊行された『思想の海へ—解放と変革』全31巻、あるいは1999年から青木書店から刊行された『民衆運動史—近世から近代へ』全5巻を参照。